タイトル　子どもたちの体験活動による住民参加のまちづくり促進に関する考察

著者　倉原宗孝・後藤由紀・日景敏也

内容

これからのまちづくりでは、子どもと大人、計画者とユーザー、プロとアマといった二項対立的主体関係の枠組みを取り払い、各人それぞれが個性と価値観を持った計画共同主体として、ハード・ソフトの総体としての住環境形成に関わっていく必要がある。その際、地域環境の使い手である住民が如何に自らの住環境に対する関心を高めていくかが問われるが、本研究では子どもの目線からまちづくりを考えることの実践的取り組みとしての「こどもまちかど解決隊」の活動を通して、住民主体のひとつである子どもたちの住環境に対する関心が高まったこと、また、大人たちにおいてもそうした子どもたちの姿に触れ、活動に巻き込まれる中で、住環境への関心とまちづくり意識が触発されていることが確認された。研究の視点で掲げた子どもの目線をまちづくり文脈に融合していくことの意義については、活動内容と経過の観察、アンケート・ヒヤリング調査結果から、明らかに住環境・まちづくりに対する子どもたちの意識は高揚し、活動は未来のまちづくり人としての子どもたちを育成していく効果があった。活動の中での問題や課題を乗り越える上で、子どもたちが住環境と関わる中で生まれた独自の発見・発想は示唆的であり、子どもたちをまちづくりの計画プロセスの中に位置づけることの必要性と司能性がうかがえた。また、活動を通じて大人たちの潜在的要求がこぼれだしてきたり、地域各主体間関係を紡ぎ出す効果も確認された。ところで、今回の活動に参加した子どもたちは主に小学校高学年生であった。

子どもたちのまちづくりへの参加は計画に直結する具体的成果を生み出すこと以上に、入々が活動やまちづくりに興味を高め、協働してまちづくりを進めていく「状況をっくる」上で高い効果があることがうかがえた。これらにっいては、今後こうした活動の継続の中で、より深く多面的に明かされてくると思う。その上で今回の活動は、住民のまちづくり意識や行動を高めていく上でのきっかけとしても位置づけられるが、今後活動を継続していく上で、またまちづくりを進める上でも課題となるものとして情報公開の場・方法の拡充というものがあげられる。今回の取り組みの中で、活動内容を知っている、あるいはその一面に触れた者からは、極めて肯定的評価や活動・まちづくりへの参加・協力の意志がみられる。行政担当者へのヒヤリングにもそのことはうかがえるし、今後の活動の中で積極的に実践していきたいと思うが、その際、マスとしての情報に頼る以上に、「顔のある情報」を発信していく必要がある。一人ひとりが他者・環境と関わる中で自らの価値観として獲得した情報を、各々の個性をもって表現していくことが、まちづくりに求められている。